

石清水八幡の木々と文学

一、杉の話

石清水八幡宮の一の鳥居をくぐり、下院を抜けると、西側に高良社がある。南向きに建てられた高良社の西側にはもう斜面がぎりぎりに迫り、その上には鬱蒼とした木立が目につく。遙か昔のことになるが、弘長三年（一二六三）の八月十四日、大風のために高良社の上の山に生えていた「榎樹」が拝殿に倒れかかり、拝殿は顛倒、そこにいた宮仕の首目の男が下敷きとなって死亡するという痛ましい事故が起きている。大風は時期的に見て台風だったのだろう。この時、参詣に来ていた女性二人が別の場所で、倒れてきた木に打たれて死亡、大坂鳥居の後ろにある榎木二本は倒れて道を塞ぎ、「住吉社、北鳥居、護国寺鐘楼、東乙屋、及山上山下樹木二千余本」が転倒するという甚大な被害を被った。

生 井 真理子

『宮寺縁事抄』（以下『縁事抄』）「仏神事次第・放生会延引之事」のこの記事からは、実際にどの範囲を指すかは不明瞭ながら、当時の八幡宮を取り巻く山上山下にはかなりの数の樹木が生い茂っていたことを思わせる。『宝殿并末社等建立記』には

冷泉院御宇、康保五年（九六八）別当貞芳之時、御山樹木茂栄云々、申成巡検使十六人、三宅山住人為テ所従ニ、巡検御山云々

とある。三宅山は今の交野市附近を指し、「御山」^①は八幡宮の組織によって管理されるようになった。『縁事抄』「怪異并不浄等事」によれば、建久七年（一一九六）七月二十日に、高良大明神宝殿の上の榎木に落雷したとあるから、高良社のそばの杉の木存在は少なくとも十二世紀後半まで遡ることができる。ただ、この杉の木が文学の世界に現れることはなかったようである。石清水八幡の杉が歌

に詠まれたのは、末社の住吉社のそばにあった杉の木で、『後拾遺和歌集』巻二十には、

石清水にまいりて侍ける女の、杉の木のもとにすみよしの社を
いはひて侍ければ、やしろのはしらにかきつけて侍ける

読人知らず

さこそはやどはかはらめすみよしの松さへ栢になりける
かな

という歌が残っている。白河天皇の勅により源通俊が撰した『後拾遺和歌集』は、応徳四年（一〇八七）の完成とされるから、十一世紀頃の光景なのだろうか。建築物から判断して、建久年間から建長年間（一一九〇～一二五六）までの間の社頭の様子を描いたものを粉本とすると推測されている。「貞和二年（一一三四）の感得図」

系統の古図を見ると、山上の本殿は楼門と回廊で囲まれ、さらにその周囲は、南は馬場に続き、東西北は鳥居と築地塀で区切られる。

住吉社はその築地内、西鳥居の北側に木とともに描かれている。^②

『男山考古録』（以下『考古録』）には「善法寺家古図には傍に杉を「画けり」とある。

『後拾遺和歌集』の歌は、住吉と言えば松なのに、勧請されてきた石清水では杉なのですね、と戯れたわけだが、石清水八幡では杉が代表的な樹木としてあったわけではない。また、現代では男山と

いえば竹林のイメージがあるが、孟宗竹は江戸時代に入ってきたもので、男山一帯の孟宗竹の竹藪は昭和三十年から五十年にかけて急速な拡大をみたという。^③ 竹については和歌では、正徹（一四五九没）の『草根集』に、

石清水人もかれとすなほなる心を竹にうつしてぞすむ

住吉の神もしるらん石清水生いそふ竹の世世の言のは

とあるのが早い例だろうか。近世では男山の一部であった美濃山付近一帯などはげ山だっただけだ。^④ 時代によって石清水の景観も変化しており、古い時代の和歌の世界でいえば、石清水八幡では、むしろ松がよく詠まれている。本稿では、平安時代から十四世紀初期頃までを対象に、石清水八幡宮を取り巻く木々と古典文学の関係を辿ってみることにしたい。

一、檀下の榎

清和天皇が即位した貞観元年（八五九）の頃、大安寺の僧行教によって宇佐から八幡神が勧請され、もともとあった薬師如来を祀る山寺を護国寺と改めて、それと一体となった形で石清水八幡宮は歴史を刻み始める。三善為康（一一三九没）著『金剛般若経験記』（石清水別当幸清著『口不足本諸縁起』所引）や、正安三年（一一三〇）から嘉元二年（一一三〇四）の間の成立とされる『八幡愚童訓』

〔乙本〕(以下『愚童訓乙』)「遷座事」には、山崎離宮に着いた行教が八幡神の示現により、男山石清水鳩の峯の上に金色の光を見、山上に大櫓の木があつてその枝条より光が放たれているのを発見したとする。永享五年(一四三三)、室町幕府の將軍足利義教が書き

写した『石清水八幡宮縁起』では、「行教心中に思けるは、此山はひろし、さらに何の辺にかましますべきと疑をなす処に、石清水の辺に三本の榊生出たり。和尚即此をもて御影向の砌と定けり」とある。貞観五年(八六三)の行教作と伝える『護国寺略記』や、長徳

元年(九九五)の平寿による『石清水遷座縁起』には櫓や榊の木は登場せず、後世の潤色であらうけれども、櫓が仏に供えられたり線香の材料となるものであり、榊は神の「よりしろ」になるという、両方とも非常に宗教性の強い植物であることは、建立縁起にいかにもふさわしい。神が鎮座する場を象徴する「光る櫓」は、八幡が出家して大菩薩という称号を持つ神であり、八幡の御正体として阿弥陀三尊(『愚童訓乙』も同じ)が顕現したという伝承ならでの発案と言つてよい。『新古今和歌集』巻十七には、晩年出家して「八幡の御山にこも」つた小侍従の^⑤

しきみつむ山ちの露にぬれにけり晝おきの墨染めの袖

という歌がある。小侍従は石清水別当光清の女であり、近衛天皇の皇后となつた多子や高倉天皇の宮中に仕え、歌人として名高い。

『山城名勝誌』巻十八が引く杜家説によると、彼女の坊は「款冬坊」と号し、その旧跡は椿坊(山上馬場から坂道を東へ少し下る)の後山にあつたという。この歌から八幡の山中には実際に櫓の木があつたことが推測される。

一方、『石清水八幡宮縁起』の「三本の榊」は八幡宮に祀られる神が八幡大菩薩と二人の女神であつたことに基づいた発想であろう。榊もまた、小侍従の弟である成清が、「八幡宮の権官にてとしひさしかることを恨みて、御神楽の夜まゐりて、

さかきばにそのゆふかひはなけれども神に心をかけぬまぞなきと詠み、榊にむすびつけている(『新古今集』巻十九)。成清は永暦元年(一一六〇)から文治三年(一一八七)までの二十八年間権別当であつた。異腹の兄たちとの確執に苦しみながらの鬱屈した思いを、抑えめに訴えたものである。『考古録』所引の

護国寺牒曰、「永久元年(一一二三)六月二十九日戌寅、被行軒廊御卜、是石清水宮宝前榊鳩巢生子事云々」

又曰「保安四年(一一二三)癸卯十二月十二日辛酉、右大臣(藤原家忠)参陣行廊御卜、石清水宮宝前榊枝鳥昨散事也云々」
* () 内は筆者注す。

の記事から、十二世紀の初めにはすでに、本殿の宝前に榊の木が生えていたことが確認できる。文永十二年(一一七五)成立の『八幡

「宮寺年中讃記」(以下「讃記」) 正月三日条に、

庭前の橘ここに落つ、これを拾ふ者は吉祥を得。壇下の榊多く立てり。これを拝する者は願望を満つ。(以下略)

とあり、榊が社殿の壇下にあつたことを記している。正安元年(一二九九)の「一遍上人絵伝」巻九に描かれた石清水八幡宮外殿の前には、幣殿を隔てて東西に二本の高木が描き込まれている。これが「壇下の榊」であろうか。寛喜四年(一一三三)三月二十五日の『石清水若宮歌合』「社述懐」の部には、沙弥寂身の

わがたのむ神のみ前の榊葉にかけてぞ祈る繁き嘆きを

という歌もあり、先述した成清が歌を結びつけた榊の木は、宝殿のすぐ前に茂る榊の木であつたと推定することができよう。『石清水八幡宮縁起』に登場した、神の影向を象徴する三本の榊も、こういつた社殿の前に生えていた榊の木の存在が前提として発想されたものと考えることができよう。

弘長年間以後、文永八年以前(一一六一―一二七一)の成立かとされる『八幡宮寺巡拝記』(以下「巡拝記」)には、寛喜三年(一一三二)の大飢饉で参詣者もまれとなつた時、八幡宮の五師が楼門の下で偶然、女神を目にして目を患うに至つた話(第三十六話)がある。武内社の方から「アラツレツレヤ」と言いつつ出てきた女房は、石清水八幡宮教清本を翻刻した古典文庫本では「柳」の下にたたず

むが、京大本では榊の下である。これと同じ現象が、第五十話、山本ノ兵衛尉ヨシツネが流罪に遇つたときに受けた示現の歌、

山鳩ハイヅクカトグラ石清水八幡ノ嶺ノ御柳ノ枝

でも起きており、京大本『巡拝記』では「柳」が「榊」に、「八幡愚童訓乙本」では「さかさばのゑだ」となっている。これらは、既述の例から見て榊が正しいだろう。ただし、右の歌は嘉応元年(一一六九)成立の『梁塵秘抄』巻二「神社歌」では、

山鳩は何処か鳥栖石清水八幡の宮の若松の枝

となつていた。『巡拝記』によれば、ヨシツネはこの嘉応元年に許されたというから、『巡拝記』の伝承が誤りだとも考えられよう。だが、松が榊に代わるのは、榊が石清水八幡宮にとつてシンボリックな存在として松を凌駕しつつあることが背後にあるとすれば、伝承の変化は単純な誤りではないこととなる。

石清水八幡宮の榊は前述の例の他、正治二年(一一二〇)の『石清水若宮歌合』に、

あまくだる神ぞちかひしさか木葉に月もかごとの影宿しけり
(太皇太后宮小侍従)

けふ見れば榊に花ぞ咲きにける神の心もゆきにやあるらん(前中納言藤原隆房)

神垣やさす榊葉に白妙のゆふかけてけり今朝の初雪(沙弥寂

信)

また、寛喜四年(一一三三)『石清水若宮歌合』でも、正四位左京権大夫藤原信実が

男山ゆくてふおいの榊葉のかけたのまるる道をしらばや

と詠むなど、和歌の世界にしばしば取り上げられたが、松と異なり、あまり時代を遡ることができない。榊そのものは古くから神事や神楽に必要なものであつたけれども、少なくとも榊の木が十二世紀初めには参詣者が拝する宝前に存在したことから、成清が神に訴える歌を結びつけ、『讚記』に「壇下の榊多く立てり。これを拝する者は願望を満つ」というように神に近い木として、ひいては「八幡宮縁起」に影向の木とまで説かれるように、榊は特別な位置を占め始めたと考えられる。

三、社頭の松

宝前の榊に対し、石清水八幡の景観を代表するのが松である。

『貫之集』や『大鏡』の「昔物語」には、平将門の乱鎮圧の後、天慶五年(九四二)にその奉養として初めて行われた臨時祭の時、紀貫之が

松をひまたまこけむすいはしみづ、ゆくすゑとをくつかへま
つらん

と詠んだと伝えるが、これが正しければ石清水における松の歌はいまのところ、この歌が早い例になる。『縁事抄』「怪異不浄事」の天慶二年(九三九)条には、「殿前松枯」とあつて、天慶年間にはすでに宝殿の前に松があつた。『考古録』所引の「延久五年(一〇七三)九月二十三日」の護国寺牒には、「有軒廊御卜、八幡宮寺言上御殿前松枯損事也」とあり、延久の頃も松はやはり宝前にあつた。建仁元年(一一〇一)十二月二十八日の石清水社歌合のものと推測されている歌群には「社頭松」の歌題があり、十一首が拾われている。その中で、

八幡山跡たれそめしめのうちに猶万代と松風ぞふく(後鳥羽院)

君が代を祈るしはしみづがきやおひそふ松のいく千代かへん
(藤原俊成)

という歌の「しめのうち」「みづがき」という表現から、回廊内や、鳥居で区切った境内に松があつたことを推測させる。また、

おとこ山みねの松風かみさびて こそゑにかよふあさくらのごゑ
(後鳥羽院中納言)

さか木とる庭火のかげにひく琴のしらべにかよふみねのまつ風
(小侍従)

の歌にいう「みねの松風」は、周辺に松が群生していたことを思わ

せる。文治四年（一一八八）成立の『千載和歌集』巻十二・恋歌二に、「石清水の歌合」で詠んだとある、

はかなしな心つくしに年をへていつともしらぬあふの松原

という歌（権中納言藤原経房作）では、「待つ」に掛けながらも、実景としての「松原」を想定できよう。また正治二年（一一〇〇）

『石清水若宮歌合』の歌題「祝」に歌われた、

おとこ山生そふ松の数ことに君や千年の末を見るべき（小侍 従）

などの歌も男山のあちこちに生えていた松が、長寿・永遠性などと重ね合わされながら詠み込まれている。藤原家隆（一一三五～一二三七）の『壬二集』の「夏の社」を詠んだ、

八幡山松かげすずし岩清水夏をせきてや跡をたれけむ

の歌も、清らかな水が湧き出て流れとなっているあたりの風景を想像させる。『一遍上人絵伝』には山上の八幡宮周辺には松ばかりが描かれ、『愚童訓乙本』は放生会の帰路を「山路の鹿の鳴き声哀を催して、身にしみわたる松の風」と表すように、こういった景観が十二世紀にはすでに出来上がっていたことを推測させる。

建久二年（一一九一）三月三日の『若宮社歌合』（判者、顕昭）

の跋文は、

北にのぞめば、はこやの松あたらしくとなりをしめ玉ひて、十

返り開くる花の色さかりに匂ひ、西に向かへば、千代にひとたび澄める水のどかに流れて。生けるうろくづを放つ河瀬かとおほめかる。あけの玉垣は、光をやはらぐるしるしにかなひ、三つのひろまへは、塵に交はる跡をあらはせり。

と、或る地点からの眺望を描く。放生川を西と見る位置は、東の木津川には生まれた平地であり、この辺には八幡宮寺の祀官達の住居があった^⑩。八幡の地から東北には都が望めるから、ここにいる「はこやの松」は六十五才の後白河法皇、「十返り開くる花」はまだ若く華やかな十二才の後鳥羽天皇を実景に重ねているだろう。源兼昌は『永久四年百首』（一一一六）に、

男山みねのさくらにもろ人のかざしの花をたぐへてぞ見る

と詠み、平経正は八幡臨時祭の使となった時、「社頭花さかりに侍しかば」とて、

かみがきのはなのさかりにうちむれてをらぬさくらをかざすも

ろ人（『経正集』）

と詠んだ。「かざしの花」は臨時祭に出向く舞人・陪従たちが「挿頭」に桜の花を賜ってつけた（勅使は藤）ことを指す^⑫。十二世紀の頃にはすでに山桜もあったのである。正治二年『石清水若宮歌合』の藤原経家の歌、

おとこ山松のみどりに色はへてにほひもことに見ゆる花かな

に対して、判者の内大臣源通親が「おとこ山松のみどりに色はへん事、当社の本意なれば」と評しているところから見ると、濃い翠の松と薄いピンクの桜の美しい色の取り合わせを意図して、社頭の桜がわざわざ植えられたことを推測させる。

以上のように和歌の世界では、常緑の松は、時に常套的な長寿・永遠のことほぎの意味を重ねつつ、八幡の景観として好んで詠まれたが、八幡宮寺の行事で松は特別な役割を担うことがあった。「讚記」は志水円満寺の唯心上人が、八幡宮寺の一年中の仏神事をきわめて文学的に活写・解説・賛嘆したものである。彼は広沢流の「貴き真言師」として知られた人物で、『沙石集』、『本朝高僧伝』にも名を連ねている。^⑬この八幡に住む僧の視点から描いた『讚記』によれば、七月十五日は安居の日で、安居の巡役は種々の供物を捧げ、特に宝前に供える造花の細工や御殿の風流に工夫をこらし、庭には宝樹を立てたという。宝樹は浄土に生える木だが、使われるのは六本の松である。十五日以前、巡役の頭人は「数輩の同類を卒して」、山路から松を引き、村里を経て、苔むす山上への曲がりくねった山道を、力を合わせて曳き上げてゆく。その横で、「鼓を叩く声は息まず、往く間隙無し、扇を撃ぐる手は頻りに舞う」のである。かくして山上の宝前の庭に立てられた青木には、「千万人」もの人が集まる十五日の夜、石清水の村民がまるで猿のように軽やかに登って

枝の上の鳥を演じ、貴賤老少は宝樹の周りを巡り、松の枝に数多の白布を懸ける。満月に照らされて輝く白布は微風に揺れ、極楽浄土の美しい珠網を想わせるのだ、と。^⑭ここに言う「七種の宝樹の林」「真珠の網」は、『感無量寿経』の「宝樹観」に基くのだろう。と同時に、村里をわざわざ経て行くのは神聖な木を迎える村の祭を思わせ、数多の白布を懸けられた松は、びっしりとユウシデを懸けた「ひもろぎ」を想起させる。前日の十四日には宝樹の下で夏安居の自恣が行われ、十五日には宝樹や社殿を莊嚴し、菩薩戒会が行われた。神事と仏事が融合した形で進行するこの行事で、宝樹に松が選ばれたのは、常緑ゆえにめでたいものとされたからだけでなく、毎年、形や大きさを選んで使えるだけの大量の松が山にあったということも大きな条件ではなかっただろうか。

四、庭前の橘

正治二年『石清水若宮歌合』「祝」には、沙弥見仏（藤原親盛入道）の

男山みねに年ふる玉つばき八千代の影は君を見るべき

という歌があり、橘もあった。『讚記』には正月三日の節会の際、宝前には御供とともに伎楽が奏され、僧侶も皆参り、「話談之言辞成祝、或寄椿葉兮論尊徳、長生之春翠無限、或对松花兮契仙齡」と

記す。冬も葉がつややかな緑を保つがゆえに長生に結びついて椿は愛でられていた。また、『吉記』寿永二年（一一八三）七月二十四日条には、「今日雷公落八幡宝殿後塀桐樹、回廊少分焼失云々」とあり、宝殿の背後、回廊のそばには桐もあつたらしい。『一遍上人絵伝』には宝殿のすぐ後ろに何本かの木が描かれている。

異本文永一日御修理記曰、御殿後犬防内、榊一本、棕桐一本、被伐之、また榊一本榊一本掘退、被移植于若宮御後云々（『考古録』所引）

という『一日御修理記』の記事によれば、文永八年（一二七一）の頃には本殿の後方、犬防より内側には榊・棕桐・楠などの木が生えていた。あるいは、『讚記』正月三日「御節会事」には「宝社を廻れば則ち菩提樹有り。来客其の風に当たれば業障を払う」という俗信が記され、末社などが並ぶ鳥居と築地塀で囲まれた境内のどこかに、釈迦が樹下で悟りを開いたという菩提樹さえも植えられ、いかにも宮寺らしい雰囲気醸し出していた（中国産種であろう）¹⁶。

『縁事抄』「怪異并不浄等事」には、
永承六年（一一〇五）正月 日、鳩度々死、櫻桐（しゅろ）枯、
榊木倒

長治二年（一一〇五）四月五日、宝殿前榊鶏落死事、（在宣命）
という記事がある。「怪異」を言う場合、宝前が問題になっている

ことが多いので、十一世紀には棕桐も宝殿近くにすでに植えられていたと思われる。南国産の木ではあるが、早くから海を渡ってきていたのであろう。『後撰和歌集』巻十七、雑歌三には、行明親王が臣延法師に前栽に植えている棕桐の木を一本所望した時、臣延法師の詠んだ歌、

風しにもいろいろ心もかはらねはあるじに、たるうへ木なりけり
が採られている。行明親王は天曆二年（九四八）に薨去、『枕草子』には「姿なけれども、棕桐の木、唐めきて、わるき家の物とは見えず」とあつて、遅くとも十世紀前半の頃から、常緑の異国情緒ただよう庭木として珍重されていた様子が伺える。院政期以降、棕桐が有力大社や長谷寺に植えられている例が指摘されているが、神の庭にも貴族趣味が反映されていたかも知れず、直ちに宗教性に結びつくかどうかは未詳である。

以上の木々はほとんど和歌や説話に姿を現すことはなかった。それに対し、宝殿の前、幣殿の東側に植えられていた橘は、和歌では正治二年の歌合に「郭公」の歌題で詠まれた程度だが、話題の多い木であった。『大鏡』「昔物語」には、良峯衆樹が五十を過ぎてても出世できず、石清水に詣でて「御前のたちばなの木」が少し枯れているのを見て、

ちはやぶる神のみまへのたちばなもろきともにおひにける

かな

と詠んだところ、神が哀れんで橋も栄え、衆樹も蔵人頭に選ばれて宰相にまでなったという。『公卿補任』によれば、衆樹は延喜十五年（九一五）に蔵人頭、同十七年に五十六才で参議となつて、同二十年に没した。もつとも、『大鏡』のこの茂樹の語りに聞き手の侍が、「賀茂の御前にとかや、はるかかのよのものがたりに重部申侍めるは」と難じているように、賀茂と石清水の二系統の話があつたようである。衆樹の話が歴史的事実かどうかはともかく、白河院政期初めに成立したと推測されている『大鏡』の時代にはすでに、石清水宝殿の前に橋の木があつたからこそ、衆樹の石清水系の話も信じられたのであろう。臨時祭や放生会の奉仕で官人が石清水に行くことは多く、橋の存在は確認できたはずだからである。同じ話を載せる『愚童訓乙』では「此橋は名木にて回廊の内の東にあり。籬しまわしたる是也」と記し、『春日権現験記絵』巻十二にはその橋が明確に描かれている。

橋は常緑で、古代にはその実は常世の「ときじくのかくの木の美」と同一視され、常磐木として霊力のある木とされた。だが、衆樹の話の場合、宝前の橋は老いて枯れ、再び活力を得るのは八幡神の力によるもので、その神の心を動かしたのは衆樹の詠んだ歌の力であるところに、この話の新鮮さがあつた。衆樹の話は『巡拝記』

や『愚童訓乙』にも収められるが、両書にはこれに並んで、鳥羽から石清水に月詣をして三つなりの実のついた橋を賜つた入道の話がある。常に同道していた男がうらやんで所望し、実際には与えずに「橋を与える」という口上だけを喜んで受け取つた男は栄え、入道には靈験がなかつたという。この話だけでは橋の実をどこでどのように得たのか、わかりにくいのだが、『讚記』に「庭前の橋ここに落つ」とあるところから見ても、宝前にあつた橋であつただろう。『巡拝記』には「近キ事ニテ」とするから、十三世紀の頃には宝前の橋は神の所有する木として、庶民の間で新たな信仰の対象となつていたのである。

そして、『讚記』に「これを拾ふ者は吉祥を得」とあることは、勝手に橋の実をもぎ取つたり、枝ごと折り取つたりすることは禁じられていたことを示唆する。嘉禎元年（一二三五）春日社領大住庄と石清水領薪庄（両庄とも今の京田辺市内に地名が残る）が用水のことで争いとなり、薪庄民が大住庄民を殺害した。憤つた興福寺の衆徒は、六月三日、八幡を焼き払うために出發、六波羅探題は八幡宮防御のために武士を多く派遣する。『巡拝記』はこの時のこととして、

此所ノ守護ノタメニ武士多来テ、武士ノ下人酒ニエヒテ若宮ノ御前ノ東ナル橋ノサガリタルヲ、口ヲ寄テ中ヨリクヒチギル、

壇ノ御子ドモ是ヲ見テ、アレイナル物ノ神罰ニアツカルゾカ
シト、各ノロヒケリ。此俗何トガ有ベキトテ東ノ鳥居ヲ出ル所
ニ、ウツブシニタフレテ血ヲハキテ形死ス。是ヲカキテ京エノ
ポリヌ。然ニ二三日ト云ニ命タエヌ。神慮感アリテ、橋ヲ給ル
人ハ其利生アラタ也。神慮ヲハバカラザルモノハ、其罰アラタ
也。尤モツツシミ信ヲナスベシ。

と記した。「壇ノ御子」は若宮にいた巫女で、「一遍上人絵伝」にも
描き込まれている。『考古録』巻四には、「田中家田図」には、同所
（＝若宮）拜殿の東の方に橋樹に埒結廻したり」とある。この事件
の時には興福寺の大衆たちは薪庄を焼き討ちするだけで退散し、閏
六月には神人が神輿を山下に下ろそうとすると、その際鎗が自然に
はずれて扉が開くという霊験が喧伝され、その後の訴訟においては
興福寺側が結局敗退するなど、八幡宮側の意気高揚した時の話だけ
に、神罰のあらたかさも力強く語られている。が、現実的な見方を
すれば、神の所有する木は神域全体であつたはずで、橋だけに神罰
が強調されるのは、橋の場合その実が食べられるだけに、管理も大
変だつたことを示しているだろう。

一方『平家物語』には、高良社にも橋に関する伝承が見られる。
後白河院の寵臣だつた新大納言成親は大将のポストが空いたことか
ら、競望者の一人となる。院の反応もよかつたので「さまざまの

祈」を始めた。まず、八幡に百人の僧をこめて、真読の大般若を七
日読ませるが、その最中に、

甲良の大明神の御まへなる橋の木に、男山の方より山鳩三飛来
ツて、くいあひてぞ死にける。
(寛一本「鹿ヶ谷」)

という凶事が起こつたとする。分をわきまえない成親の野望を批判
的に描いたものだけに説話化が進んでいると見られ、話そのものの
信憑性は低い。ただ、それはそれとしても、この伝承によれば高良
社宝前にも橋があつたことになるのだが、詳細は不明である。高良
社は末社でも格は高く、山下の高良社には拜殿があつたから、鎌倉
期には本殿・若宮に倣つて植えていた時期があつたのかも知れない
(山上にも勧請されて上高良と呼ばれた小祠が若宮の西隣にあつた)。
あるいは、もし、本殿あるいは若宮との混同で伝承が創作されたの
なら、それだけ宝前東の橋が名高かつたことを意味するだろう。
『考古録』によれば、本殿前の橋はその後、西側にも植えられるよ
うになる。宝暦十三年（一七六三）には、正月に回廊内に参入した
群衆によつて押されたり、実を取られ、枝を折られたりしたため、
東西の橋に埒を結び廻らせたが、文化九年（一八一二）には回廊内
への群衆参入を禁止して埒は取り払われた。『考古録』が書かれた
嘉永元年（一八四八）の頃にはすでに東側の橋は枯れてなくなり、
西側の橋だけが残つたという。（現在は東西にある。）

平安時代から鎌倉期にかけて、石清水八幡宮と男山の景観を形成する木々に関する情報は、時空ともに「点」というべき僅かな情報が断片的に文学や記録に残されているだけである。本稿で述べてきたことを整理するならば、歌に詠まれる木の種類は限られており、もつとも多く詠まれたのが松で、他に桜・榊・橘・椿・杉・栂・竹などが挙げられる。松は常磐木として和歌では予祝の意味をもつて好まれたが、一方その男山の景観を代表する木としてもあった。また、安居の宝樹として特別な役割をすることもあった。記録類からは棕櫚・桐・槻・楠・菩提樹などの存在も知られるが、ことさらに歌材や話題になることもなく、話題性では宝前東の橘が目立った存在である。宝前の庭は決して広い場所ではなく、儀式などが行われる折、多くの木々が茂っているのは邪魔にならずで、かなり人為的に管理されたと思われる。神前にある榊は榊木となるだけに鎌倉期には祈願と結びつき、橘は後世まで大切に植え継がれ、長い歴史を刻んだのだ。総じて、桜はともかく、常緑の木が目立つのはやはり常磐木特有の縁起の良さを好んだ日本人の感性を反映しているよう。

まだまだ見落とした木の資料は数多いかも知れず、和歌の解釈などにはほとんど立ち入らずに植物そのものに焦点を当てているため、不備も多々あろう。それでもなお、本稿でのささやかな考察が、石清水に関する和歌や説話などのより具体的に豊かな理解の一助に

なれば、と思う。

*テキストは『男山考古録』は『石清水八幡宮史料叢書一』、『八幡愚童訓(乙本)』は岩波思想大系本、『口不足本諸縁起』『石清水八幡宮縁起』は『石清水八幡宮史料叢書二 縁起・託宣・告文』所収、『宝殿并末社等建立記』は『石清水八幡宮史料叢書五 造営・遷宮・回録等』所収、『宮寺縁事抄』は神道大系、『八幡宮寺年中讃記』は『石清水八幡宮史料叢書四 年中神事・服忌・社参』所収、『古記』は増補史料大成、『八幡宮寺巡拝記』は古典文庫『中世神仏説話』所収、及び、京都大学国語国文学資料叢書『八幡宮巡拝記』、『正治二年 石清水若宮歌合』は古典文庫『中世歌書集』(井上宗雄編)所収、『梁塵秘抄』『千載和歌集』『新古今集』『後拾遺和歌集』『枕草子』『後撰和歌集』は新岩波古典文学大系、『大鏡』『平家物語』は岩波古典文学大系、『建久二年 若宮社歌合』、『寛喜四年石清水若宮歌合』『草根集』『壬三集』は国歌大観、『経正集』は私家集大成の各本を用いた。なお、読みやすくするために適宜濁点などを私に補っている。

注

- ① 交野郡三宅山は八幡宮寺の領有する荘園の一つとして延久四年(一〇七二)の太政官符に現れ、その中の御倉町の遺跡の一部と推定される遺

構・遺物が、平成十二年にJ R河内野船駅付近で発掘されている。(交野市教育委員会・交野市文化財事業団、平成十二年五月二十日の森遺跡発掘調査現地説明会資料による。)

- ② 絵図は十二・三世紀頃の様子を記す『宮寺縁事抄』第一末の末社の頂の位置とも合致する。古絵図と末社の位置に関しては、土田充義氏著『八幡宮の建築』第四章(九州大学出版会、一九九二年発行)を参照。根津美術館蔵・大蔵文化財団蔵の石清水八幡宮曼陀羅、森本家蔵石清水八幡宮社頭図、谷村家伝来絵図に描かれる木々は決して同じではないが、すべて住吉社の横(南側)に一本の木が描かれる。

- ③ NPO法人森林再生センター、高田研一氏「平成十四年度の八幡市男山における植生調査・放置竹林侵入竹林実態調査報告」、平成十五年、八幡市発行。

- ④ 水本邦彦氏「江戸時代の里山」、『男山で学ぶ人と森の歴史 調査報告書』所収平成十五年、八幡市教育委員会、平成十五年三月発行。

- ⑤ 『玉葉和歌集』巻十八・雑歌五に、「高倉院御時、内にさぶらひけるが、さまかへて八幡の御山にこもりぬと聞て、刑部卿頼輔もとより、君はさは雨夜のみか雲より人にしられて山に入ぬる、と申をくりて待ける返事」という詞書と、小侍従の歌「すむかひもなくて雲るに有明の月はなにとかいるもしられん」が見える。

- ⑥ 拙稿「古事談」第五「神社仏寺」第十一話について「成清の石清水祀官任官事情を中心に」『日本文学』二〇〇一年9月号所収、参照。

- ⑦ 引用は『大鏡』『続古今集』所載のものによる。『袋草紙』や国歌大観本「貫之集」では「松もおいでまたこけむすに石清水行末とほくつかへまつらん」「岩し水松かけたかくかけみえてたゆべくもあらず万代までに」の二首を朱雀天皇に奉ったという。この歌に関する問題点については、田中喜美春氏「古今集の成立と石清水八幡宮」(『国語と国文学』昭

和五十八年二月号所収)参照。

- ⑧ 古典文庫『未刊 中世歌合集 上』(谷山茂・樋口芳麻呂編)に所収。
⑨ 回廊内、宝殿前東にあった橘の木を、正治二年「石清水若宮歌合」の歌題「郭公」の6・22・33番の歌などは「神垣」「しめのうち」と表現することから判断。

- ⑩ 近世の内閣文庫所蔵の絵図によれば、放生川に沿って人家が密集していて、常磐・土橋・田中などという地名が見える。常磐といえは第二十三代別当道清の号で彼の住居があったといい(『考古録』)、田中は第三十一代別当道清の号で彼の子孫の号ともなった。土橋の旧名は「竹」で(『考古録』)、顕昭の和歌の弟子となった第三十三代別当幸清を初めて、竹を号とした祀官が何人も系図から見いだせる。すなわちこのあたりには八幡宮祀官たちの住居があったわけで、跋文が書かれた地点を考える場合、示唆に富む。

- ⑪ 『顕広王記』安元二年三月十三日条。「石清水臨時祭、祭如例、使大官亮平経正朝臣。井上宗雄氏(経盛・経正)(平安後期歌人伝の研究増補版)笠間書院、一九七八年発行)に指摘がある。

- ⑫ 『年中讀記』上巻、三月臨時祭の項、「朝使結藤兮挿簪花於巾子、雲客攀桜兮添素苾於冠間」。『西宮記』十八臨時六には、石清水臨時祭の日、王卿の前に舞人着座して酒肴と挿頭を「使舞人」に「石竹」、陪従には「阿千佐為」を給う、とある。『公任集』には「石清水かさしの藤の打なひき君にそ神も心よせける。公任は永祚元年(九八九)三月十三日に臨時祭の勅使となつてから、この頃にはすでに挿頭の花の種類も変化していた。

- ⑬ 『沙石集』巻二(岩波古典文学大系)、『本朝高僧伝』巻五十五「城州八幡沙門唯心伝」。

- ⑭ 原文は「自山路兮引松樹、経村里赴苔径、渡程多曲、叩鼓之声不息、

往間無隙、擊扇手頻舞、遂到山上、所立庭中也。然後、十五日夜、千人

人聚処、登彼木者、宛如峽猿之抱樸。望其梢者、各喻林鳥之遷枝、彼等

雖為石清水之村民、不異吉野山之杣人。老少爰之多集、貴賤繞之旁來、

即以數多之白布、各懸六本之青木。爰微風吹而飄飄。孰与七重林之垂珠

網、滿月照而皎潔。其奈九品土之飭銀台。故以此翠松、今所名宝樹也」。

⑬ この安居の行事については、杉本尚雄氏の論文「石清水八幡宮安居諸

頭役」（『熊本大学教育学部紀要』第十号・昭和三十六年）が詳しいが、

『讀記』を信用する限りでは、宝樹に関しては少々誤解があるように思

われる。

⑭ 『元享釈書』によれば、建久年間入宋した柴西が天台山から日本へ、

菩提樹を移植して広まったと言う。滋賀県立大学の野間直彦氏によれば、

クワ科のインド種は日本では育たない。中国産はシナノキ科。

⑮ 瀬田勝哉氏「宝前の棕櫚」、「木の語る中世」所収、朝日選書、二〇〇

〇年発行。

⑯ 記録で確認できるのは、『宮寺縁事抄』「仏神事次第」の政事次第、正

治元年（一一九九）九月七日、正印御政次第の条に、「楼門内東二令彷彿、可賜祿、役從僧一人（幸春）東橋木辺ニ可參儲之」という記事が、

管見では早い例となる。

⑰ 八幡宮の武士による守護に関しては『百鍊抄』文暦二年六月三日、

『明月記』同三・四・五・七・九・十六日条等参照。『明月記』によれば

警護の武士達は十六日に帰ったようで、下人の橋事件は三日から十六日

の間に起きたことになる。また、鑑の靈験に関しては『頼資卿記』同間

六月二十日条等参照。

最末尾ながら、八幡市教育委員会・生涯学習課の竹中友里代氏には、

谷村家藏絵図の貴重な写真の御提示等々、さまざまにご高配を賜った。

ここに心より篤く御礼申し上げます。